

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：24403

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K13299

研究課題名（和文）アイデンティティと精神的健康の日常・発達の関連についての縦断的研究

研究課題名（英文）A longitudinal study of the everyday and developmental associations between identity and mental health

研究代表者

畑野 快（Hatano, Kai）

大阪府立大学・高等教育推進機構・准教授

研究者番号：50749819

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、若者の将来に対する意識と精神的健康の関連について明らかにすることであった。この目的を達成するために、複数の時点で経験サンプリング法（短期間に繰り返しデータを収集する手法）を行った。統計的解析を行った結果、日常的に将来の計画に安心感を抱いている若者は人生満足感・幸福感が高い一方で、不安を感じている若者は逆の傾向にあること、日常的に将来の計画から安心感を得ている若者はほとんどいないことが明らかになった。さらに将来への意識は対人関係等のライフイベントと関連していた。本研究の成果は、日常的な将来への意識が精神的健康と強く関連し、その関連を促すライフイベントを明らかにした点である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで、若者の将来の意識と精神的健康の関連は、1年に1度の調査に基づいて検討されてきた。しかし、1年に1度では、その間にどのような意識の変化が起きているのか明確でないこと、その変化の理由について明確でないという限界がある。それに対して、本研究では毎日調査を行うことで将来への意識と日常的な精神的健康の関係を精緻に明らかにした。この結果は、若者の精神的健康が将来への意識と強く関連していることを明らかにした点で学術的意義がある。また、将来への意識とライフイベントが精神的健康に及ぼす影響を明らかにしたことで、その支援のための方策を考案する上でのエビデンスを提供したことに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to determine the relationship between young people's attitudes toward the future and their mental health. In order to achieve this goal, an experience sampling method (a method of collecting data repeatedly over a short period of time) was used at multiple time points. Statistical analysis revealed that while young people who routinely feel secure in their future plans have a higher sense of life satisfaction and happiness, the opposite is true for those who feel anxious, and few young people routinely feel secure in their future plans. Furthermore, awareness of the future was related to interpersonal relationships and other life events. The results of this study show that daily awareness of the future is strongly associated with mental health, and the life events that promote this association were identified.

研究分野：青年心理学

キーワード：アイデンティティ 経験サンプリング法 多変量解析 精神的健康 青年期 成人期初期

1. 研究開始当初の背景

人がいかにして健康であるか、という問いは、老若男女通じて普遍的なものである。世界保健機構(WHO)によると、健康とは「身体的にも精神的にも社会的にも安寧な状態にある」と定義されている。身体的な健康について、WHOによる「世界保健統計2017」によると、日本における健康寿命(健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間)の平均は、74.9歳と世界一である。その一方で、精神的健康についてはどうだろうか。精神的健康とは、人が主観的に幸福であることと、抑うつ、不安等の心理的問題を呈さないことの2つの視点から捉えることができる(Diener et al. 1985)。「世界保健統計2017」によると、幸福度に関しては、日本は157か国中51位とそれほど高くない。また、厚生労働省の「患者調査」によると、精神疾患の患者数は、1999年には204万人であったが、年々増加し、2014年には392万人にも上っている。これらの数値を考慮すると、日本は、身体的には世界屈指の健康の国かもしれないが、精神的側面からするとそうとは言えないかもしれない。超高齢化社会が急速に進行する現代の日本社会において、人は身体的に衰えながらも精神的健康を維持・増進しなければならない。そのためには、生涯発達の観点から、人が精神的に健康であるためのメカニズムを解明し、その支援の方策を考案する研究が当然必要となる。

このような精神的健康に影響を及ぼす個人特性がアイデンティティである。アイデンティティとは、時間的自己(i.e., 過去・現在・未来)が一致している感覚と、社会的な承認(e.g., 親からの愛情、社会的身分)を得ることで感じられる安心感との統合的な感覚である(Erikson, 1968)。生涯発達の観点からすると、アイデンティティは、社会的身分の変化に伴って危機を迎える。特に、青年期は、大人社会への移行期であることから、アイデンティティの危機が顕著になる時期とされてきた(Erikson, 1968)。青年期のアイデンティティと精神的健康の関連については長期縦断研究によって検討されてきた(Hatano & Sugimura, 2017)。具体的に、青年を対象に1年に1度の縦断調査を複数年実施し、潜在成長モデルおよび潜在成長クラス分析によってアイデンティティの発達傾向を検討した研究によると、13 - 19歳にかけてアイデンティティは全体的に望ましい方向へと発達していくが、その変化には個人差があることが明らかになっている。さらに人生満足感や主観的幸福感はこの変化に連動して変化することが明らかになっている。これらの結果は、アイデンティティの変化には個人差があること、また、アイデンティティが精神的健康の維持・増進に重要な役割を果たす可能性があることを示唆するものである。

その一方で、年に1度の縦断調査では、調査回答者が、過去、現在の状況を回顧しながら回答するため、その回答には彼らが置かれている状況が強く影響する。そのため、日常的に感じているアイデンティティ、精神的健康が本当に関連しているのか、また、日常感覚が年間を通じての発達の感覚と関連するのかわか定かでない。アイデンティティと精神的健康の日常感覚、発達の感覚の関連が明らかになれば、日々そのような感覚を意識することの重要性が確認され、介入プログラム開発への契機となる。したがって、精神的健康の維持・増進にアイデンティティが果たす役割をこれまで以上に明確にし、介入プログラムの開発に踏み込むためには、アイデンティティと精神的健康の日常感覚の関連の明確化及び、日常感覚と発達の感覚との関連を確認する研究が必要不可欠と言える。

2. 研究の目的

本研究では、先に述べた課題、すなわち、(1)アイデンティティと精神的健康の日常感覚の関連が明らかになっていないこと、(2)日常感覚と発達の感覚の関連が明らかになっていないことを克服するべく、日常感覚と発達の感覚を統合した視点から、アイデンティティと精神的健康の関連について明らかにすることを目的とする。具体的には、日常感覚は、その日に感じた感覚を数日間連続して測定する日誌法(daily-dairy method)で測定し、発達の感覚は、1時点で測定する。そして、それぞれのデータに対して統計的解析を行い、両者の関連を実証的に検討する。なお、2020年からのコロナウイルスの感染拡大に伴い、急遽その影響(e.g., 行動制限や経済状況の変化)を組み込んだ調査を実施することとした。

3. 研究の方法

(1) データの収集手続き

データの収集は調査会社(クロス・マーケティング社; <https://www.cross-m.co.jp/en/>)に委託した。Web調査モニターの中から、18歳から30歳の若者を抽出し、web上で調査を実施した。回答者には、回答にはどのような項目が含まれるか、回答中に苦痛を感じた場合はやめることができる等インフォームドコンセントを行った上で、調査に同意した対象者に調査を行った。回答者には18時から24時の間に方法に記載したアイデンティティ、精神的健康に関する項目に回答を求めた。調査時期は2019年の3月18-22日(5日間)、2021年の1月25日から2月5日(土日を除く10日間)であった。

(2) 調査対象者

2019年度の調査において、各時点での対象者数は1日目:281名、2日目:402名、3日目:

659名, 4日目: 648名, 5日目 640名であった。

2021年の調査において, 各時点での調査対象者は1日目: 733名, 2日目: 770名, 3日目: 773名, 4日目: 756名, 5日目 721名, 6日目: 765名, 7日目: 750名, 8日目: 732名, 9日目: 718名, 10日目 683名であった。

(3) 代表的な調査項目

①日常レベルでの将来に向けてのアイデンティティに関する6項目(項目例:「今日,自分の将来についてはっきりとした見通しを思い描いた」), ②幸福感に関する1項目(項目内容:「今日,幸せな気持ちだった」), ③人生満足感に関する1項目(項目内容:「今日,自分の人生に満足を感じた」), ④不安に関する1項目(項目内容:「今日,不安を感じた」), ⑤抑うつに関する1項目(項目内容:「今日,落ち込んでいた」), ⑥ライフイベントに関する10項目(項目例:今日,あなたは以下の出来事を経験しましたか。/家族,友人,恋人などと,けんか,口論をした)*以下, ⑦, ⑧, ⑨, ⑩は2021年2月の1日目だけ測定した。⑦将来に向けてのアイデンティティに関する25項目(項目例:自分が将来何をやっていくのか,思い浮かべることができる), ⑧パーソナリティ特性に関する10項目(項目例:他人に不満をもち,もめごとを起こしやすいと思う), ⑨新型コロナウイルス感染拡大にともなう行動抑制に関する1項目(項目内容:現在,新型コロナウイルスの影響で外出自粛生活を送っていますか?), ⑩新型コロナウイルスに伴う健康・経済状況の変化に関する6項目(項目例:コロナ感染拡大以前と比べて,以下のことは現在のあなたの状態にどの程度当てはまりますか?/収入が減った)。

協力者1人当たりの所要時間は2019年調査は1分程度,2021年の調査は2分程度であった(1月25日の調査のみ10分程度)。

(4) 分析手法

日誌法は数日間連続して調査を行う手法であるため,回答者の負担を軽減するため,単項目が用いられる(e.g., Klimstra et al., 2010)。そこで,まず将来志向のアイデンティティを測定する尺度(DIDS; Luyckx et al., 20008)と教育・対人関係におけるアイデンティティを測定する単項目(Klimstra et al., 2010)を参考に日常レベルでの将来志向のアイデンティティを測定する単項目を開発した。それぞれはDIDSの下位次元(i.e., 広い・深い探求, 反芻的探求, コミットメント形成, コミットメントの同一視)に沿った項目であった。

2019年の調査では,5日間のデータを用いて,開発した項目の信頼性および妥当性の検討,さらには日常におけるアイデンティティの多様性について検討を行った。信頼性に関しては級内相関係数を算出し,再検査信頼性の検討を行った。妥当性に関しては,開発した項目の因子構造の妥当性を検討するため,確認的因子分析を行った(Figure 1)。その際,性別・年齢群(i.e., 18-23歳を青年期後期群,24歳以上を成人初期群)の因子構造の差について測定分散(measurement invariance)の検討を行った。加えて,基準関連妥当性を検討するため,開発した項目と日常的な感情・気分(人生満足感,幸福感,不安,抑うつ気分)との関連をパス解析によって検討する。これらの妥当性について検討した後,日常レベルでのアイデンティティの感じ方についての個人差を明らかにするために潜在成長クラス分析(Latent Class Growth Analysis; LCGA; Nagin, 2005)を行う。さらに,LCGAによって明らかになったクラスへの所属確率と日常レベルの感情との相関関係を明らかにする。

2021年の調査では,2019年に得られた結果の再現性を検討することに加えて,DIDSと日常レベルでの将来志向のアイデンティティとの関連を検討することで,収束及び弁別的妥当性の検討を行う。さらに,コロナ禍における行動制限に関する項目との相関関係を検討する。

(5) 分析結果

2019年調査を使った分析結果は以下の通りである。確認的因子分析を行った結果,モデルの適合度から3因子構造(アイデンティティの同一視,深い探求,反芻的探求)が妥当である結果が示された。さらに,性別・年齢群(18-23歳 vs 24-30歳)について測定分散を行った結果は,スカラー普遍的レベルまで確認され,性別や青年期後期,成人期初期を通して平均構造のレベルまで同じであることが確認された。これらの結果は,開発された尺度の因子構造の妥当性を示すものである。また,パス解析の結果は,アイデンティティの同一視が人生満足感,幸福感と正の関連を,不安,抑うつと負の関連を示した一方で,反芻的探求がそれらの変数と逆の関連を示した。この結果は基準関連妥当性を示すものであ

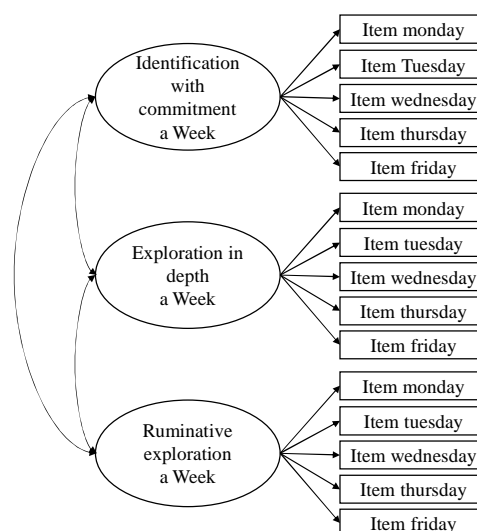


Figure 1. Three Factor and Measurement Model for Testing Measurement Invariance of Days Within a Week

った。

LCGAの結果、複数の基準で検討したところ4クラスが妥当であった (Figure 2)。それらは、全ての得点が平均的な未分化群、全ての得点が低い無問題型拡散群、深い探求と反芻的探求の得点が高く、コミットメントの同一視の得点が低いモラトリアム群、反芻的探求の得点が高く、それ以外の得点が低い問題型拡散であった。それらのクラスへの所属確率と日常レベルでの精神的健康との相関係数は、未分化群、無問題型拡散群への所属確率の高さは人生満足、幸福感と正の関連を示し、モラトリアム、問題型拡散群への所属確率の高さは逆の結果を示した。

2021年調査に関しては、DIDSと開発された単項目との相関関係を確認すると、開発された項目とDIDSの同じ下次元との間には正の関連を示し、異なった次元とはそれよりも弱い関連を示した。この結果は、日常レベルでのアイデンティティの感覚は、開発した項目の収束的・弁別的妥当性を示すとともに、日常レベルでのアイデンティティの感覚が発達的な感覚と連動している可能性を示唆していた。なお、コロナウイルスの感染拡大に伴う行動制限への意識と日常レベルでのアイデンティティの関連については現在分析中である。

4. 研究成果

本研究の研究成果は次の4点にまとめることができる。1点目は信頼性・妥当性を兼ね備えた日常レベルでの将来志向のアイデンティティを測定する単項目を開発したこと、2点目は日常レベルでのアイデンティティの感覚と精神的健康の関連を明らかにしたこと、3点目は、日常レベルでのアイデンティティの個人差を明らかにしたこと、そして4点目は、アイデンティティの発達の感覚と日常的感覚の関連性について明らかにしたことである。

1点目について、これまでの将来志向のアイデンティティの測定は25項目の尺度を用いており、回答者への負担が大きかった。それに対して、本研究では青年期後期・成人期初期に限定した場合には3項目で代替できる項目群を開発した。これは回答者への負担を大きく減じただけでなく、限られた時間での様々な介入場面(授業後、カウンセリング後など)で活用可能と考えられる。

2点目について、本研究の結果は、将来志向のアイデンティティの感覚を持つことが精神的健康と強く関連することを明らかにした。これまで、発達のレベルで両者の関係が検討されたことに対して、本研究では日常的なレベルでも両者に関連があることが確認された。このことは、若者にとって将来志向のアイデンティティの感覚を持つことが彼らの日常的な精神的健康を維持・増進する上で極めて重要であることを示している。

3点目について、興味深いことに、日本人の若者は、将来の計画についての安心感(i.e., コミットメントの同一視)をあまり感じておらず、むしろ不安を強く持っている可能性が示唆された。これまで発達研究の結果からは、将来の計画について安心感を強く持っている青年・若者群は一定程度確認されてきた(Hatano & Sugimura, 2017; Hatano et al., submit)。それに対して、本研究の結果は日本の若者は日常的にはあまりそのような感覚を持っていない可能性を示唆している。

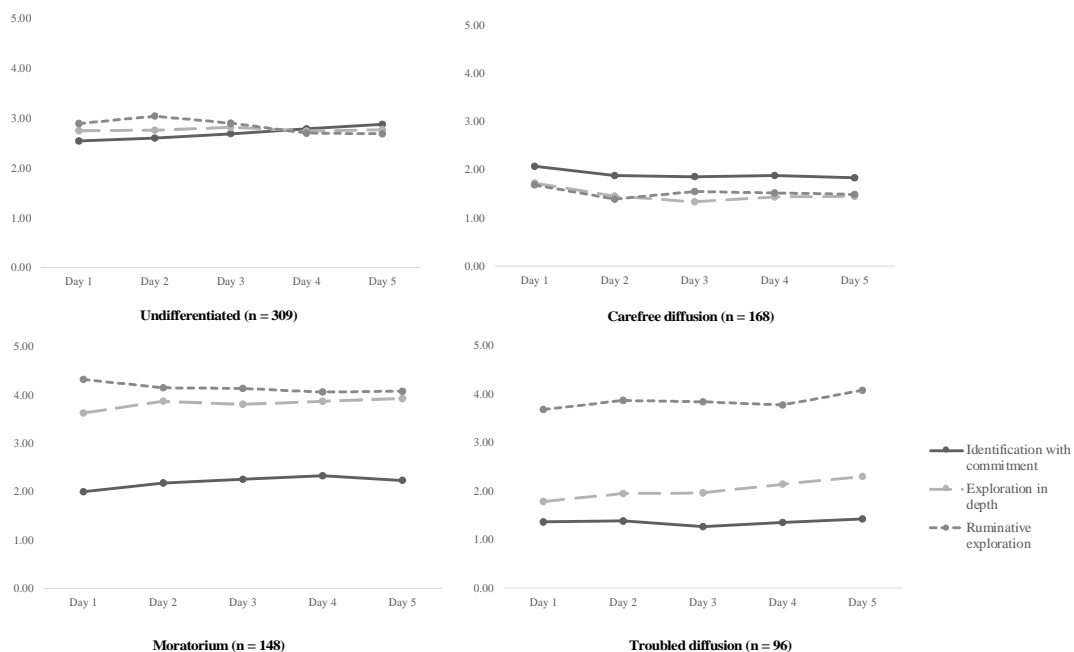


Figure 2. Mean trends for the Future-Oriented Identity Processes in the Identity Trajectories

この結果については、あらためて調査時期の影響やライフイベントとの関連を検討する必要がある。

4点目について、これまで発達のアイデンティティの感覚と日常的な感覚との関連は検討

されていなかったが、本研究の結果から、両者には関連が見られることが明らかになった。この結果から、長期的（e.g., 時点感覚が1年）なアイデンティティの結果と短期的（e.g., 日誌法）との間の連動性が明らかになり、両者の知見を統合的に考える視座を得たと言える。その一方で、3点目の成果のように、発達の視点による結果と日常的視点による違いも確認されていることから、今後も慎重に知見を蓄積し、統合できる知見とそうでない知見を弁別していくことが必要と考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 2件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Kai Hatano, Kazumi, Sugimura, Koen, Luyckx	4. 巻 49
2. 論文標題 Do Identity Processes and Psychosocial Problems Intertwine with Each Other? Testing the Directionality of Between- and Within-Person Associations	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Youth and Adolescence	6. 最初と最後の頁 467-478
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s10964-019-01182-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Kai, Hatano, Kazumi, Sugimura, Elisabetta, Crocetti, Wim, Meeus	4. 巻 91
2. 論文標題 Diverse-and-Dynamic Pathways in Educational and Interpersonal Identity Formation during Adolescence: Longitudinal Links with Psychosocial Functioning	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Child Development	6. 最初と最後の頁 1203 - 1218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/cdev.13301	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 畑野快	4. 巻 59
2. 論文標題 パーソナリティ研究の動向と今後の展望：パーソナリティ特性、アイデンティティを中心とした変化・発達研究の展開に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 57 - 73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.59.57	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件／うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Hatano, K., Sugimura, K., Nakama, R., & Tsuzuki, M.
2. 発表標題 The longitudinal relationship between youth identity development and multiple dimensions of adjustment
3. 学会等名 The 26th Annual Conference of the International Society for Research on Identity (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 畑野快・杉村和美
2. 発表標題 アイデンティティと精神的健康の縦断的関連：経験サンプリング法を用いた検討
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kai Hatano, Kazumi Sugimura
2. 発表標題 The directionality of effects between identity processes and personality traits in adolescence: Examining between- and within-person associations
3. 学会等名 European Association for Research on Adolescence (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazumi Sugimura, Kai Hatano, Tomotaka Umemura, Shogo Hihara
2. 発表標題 Attachment, Personal and Social Identity, and Adjustment in Adolescence: Focusing on Mediating and Moderating Roles of Social Identity.
3. 学会等名 European Association for Research on Adolescence (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kazumi Sugimura, Kai Hatano
2. 発表標題 How do identity processes and subjective well-being influence each other?
3. 学会等名 Society for the Study of Emerging Adulthood (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kai, Hatano, Kazumi, Sugimura
2. 発表標題 What and how do identity processes relate to the personality traits in adolescence? Examining within-person associations
3. 学会等名 European Association for Research on Adolescence conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関